



●3月半ばの高田さんのハウスでは、色とりどりのランタンキュウラスが咲き誇っていました。「土づくりは、農業改良普及センターに土壌診断を依頼し、そのデータをもとに指導を受けています。ランタンキュウラスは豪華な花が魅力。新品種の栽培にも挑戦しています」



●花の収穫は1本1本咲き具合を見極めながら、やさしく切り取っていきます。除草も手作業のため、手間と時間がかかります。



●特産のフリージアは、つぼみが少し膨らんだ時点で出荷となります。切り取られた花は、長さや葉の状態を一本一本でいかに整えられて、次の日に出荷されていきます。

子どもも見ながらこまめに調整しています」
花の間を歩きながら、高田さんは葉の状態までつぶさに観察します。土壌消毒は温水で行うなど、防除方法を工夫し、消費者のニーズにも配慮しているそうです。また、土壌データを収集・分析して、施肥設計を見直すなど、より美しい花を咲かせるための努力を続けています。

花き栽培は、手入れから収穫、選別、梱包まですべて手作業のため、手間がかかります。流行も変化するので、市場動向をとらえる感覚も必要です。高田さんは「失敗だらけだったけど、20年間続けてこられた」とおおらかに笑います。「この春から、息子が手伝ってくれることになりました。できることならこの仕事を継いでほしい」。うれしそうに話す高田さんの表情に、花への深い愛情がにじんでいました。

ハウスの一つをのぞいてみると、色鮮やかなランタンキュウラスが出荷のピークを迎えていました。幾重にも重なった花弁がひときわ華やかな印象を与えます。ランタンキュウラスは美しい反面、とても手間がかかる花で、現在むかわ町内で栽培を手がけているのは高田さんだけだそうです。「葉が出てからしか定植できず、安定した栽培が難しい花です。でも、二度決めたら徹底してやり抜きたい。浮気はしたくないからね」と高田さん。「きれいに咲いて」と花に言い聞かせていると笑います。

試行錯誤と工夫の連続 次代に引き継がれる思い

花き栽培20年目を迎えた今でも、試行錯誤の連続と話す高田さん。特に、気温が安定しない春先は、ハウス内の温度や湿度の管理に気をつかうそうです。「目安となるハウスに温度センサーを取り付けてデータを集中管理しています。うちのハウスは被覆が三重構造なのですが、その開け閉めで温度調整を行います。特に3月下旬から4月上旬は気が抜けません。太陽の様子



明日を語ろう!
北の農業人
KITANO NOUGYOUBITO



北海道農業に限りない愛情を注ぎ、
たゆまぬ努力を続ける人々がいます。
農業の未来を創造する「北の農業人」の
情熱や取り組みをご紹介します。

●気候特性を活かした地域ブランドの創出
**20年以上にわたる試行錯誤で
確立してきた花き栽培のノウハウ。
「流行やニーズをとらえながら
むかわブランドを浸透させたい」**

「むかわ町」

有限会社高田農園
代表取締役

高田清治さん



●現在、むかわ町の花き栽培農家は24軒。むかわブランドとして確立するために、栽培品目の絞り込みを行い、安定供給を図っています。



道内有数の生産地に成長 むかわ町の花き栽培

太平洋に面した胆振管内のむかわ町は、秋のシシヤモ漁や、ホウレンソウ、トマト、レタスといった野菜の産地として知られる。次産業が盛んな地域です。なかでも花き栽培は作付面積が約3万坪と道内有数の規模を誇り、通年で生産されている花々は全国各地に出荷されています。

むかわ町の二宮地区で農業を営む高田清治さんは、平成元年（1989年）から花き栽培に取り組んできました。「もともとは養豚と稲作が中心でした。先代である父が病気で倒れたことをきっかけに、花き栽培への取り組みを始めました」

以前からむかわ町では、一部の農家でカスミ草などの栽培が行われていました。高田さんが花き栽培を始めた当時は、その前年に鶴川町花き生産組合が設立されたこともあり、花き生産が推進されていた時期でした。

高田さんは、ハウス2棟からスタート。トルコギキョウやフリージア、ユリなどの栽培を始めました。その後、品質や収量が安定した種を導入することで、現在はハウス25棟にまで生産量を増やしています。「今、手がけているのは、フリージア、トルコギキョウのほか、カーネーションやスターチス、ランタンキュウラスといった種類です。市場の取引価格や人気、生産性などを考慮しながら、絞り込んできました」

ほかの産地との差別化で 魅力あるブランドづくり

むかわ町で花き栽培が盛んになった背景として、夏の冷涼な気候と春先の日照時間の長さがあります。雪も比較的少なく、年間をとおしてハウス栽培ができるため、これまでアルストロメリアやフリージアなどの通年出荷に取り組んできました。「フリージアが休眠期に入る夏場に、水温の低い地下水を球根に与えることで生育を調整し、秋から冬の間も花を咲かせることを可能にしました。競合するほかの産地と出荷時期をずらすというメリットがあります」と高田さんは、むかわ町の地域特性を活かした生産戦略について説明します。



●花がきれいに咲きそろった頃が出荷目安となるスターチス。むかわ町は日照時間が長いので、特に花の色のりが良くなるのだそうです。